

## 消える「寅さんの居場所」

書棚を整理していたら、日本経済新聞 2006 年 6 月 1 日夕刊「日本人の忘れ物 山田洋次さんに聞く」のコピーが出てきた。懐かしくなり読み返すと、10 年ほど前だが、やはり共感するところが多かった。一部だけでも紹介したい。

「わたくし生まれも育ちも葛飾柴又 帝釈天で産湯を使い 姓は車 名は寅次郎…」 48 作品で観客動員数 8 千万人、興行収入 470 億円。映画シリーズ『男はつらいよ』が 26 年間で築き上げた数字である。日本人を一番多く映画館へ運んだ山田洋次監督は「私には故郷がない」という。「父の仕事の都合で小さいころに



旧満州（現中国東北部）へ渡り、中国各地を転々とした。やたら広いだけで、どこまで行っても地平線ばかりの無味乾燥な風景が続いていた。だから、故郷を思い出したり、故郷に帰りたと言える人がうらやましかった」

『男はつらいよ』には、日本の原風景ともいべき景色があふれている。寅次郎が旅先で出会うのは、風にそよぐ稲、遠くに霞む山々、藁屋根、畦道。かつてはどこにでもあった光景だ。日本人が失いつつあるこの風景を撮り続けた。故郷とは何か。「疲れたら帰って行って、心を休めることのできる場所。美しい景色があって、懐かしい人たちがいて、そこでは全く緊張しなくていい。シャツ一枚でゴロンと縁側で寝転がっていると涼しい風が吹いてくる、そんな場所じゃないでしょうか」

描いてきた故郷に、もう一つ欠かせないファクターがある。「笑い」だ。敗戦で引き揚げてくると、食うや食わずの困窮生活が待っていた。米軍基地や炭鉱で重労働をしていたが、働く人たちが交わす冗談の面白さやその笑いに直に触れ、大いに慰められたという。「ご飯を食べるようにみんなが笑う。笑うことで、心ばかりか、肉体の疲労も回復させてくれる。笑いというものは、そんな力を持っているのだと初めて分かった」

戦後の高度経済成長で、日本の美しい風景や場所が次々壊され、心安らぐ習慣、人情、文化が捨てられてきた。「だから私は映画の中で『もう壊すな、このままで』と懸命に叫んできたつもりです。ひたすら金儲けを追い求めた戦後 60 年に思いっきりブレーキを踏む時期だと考えている。寅さんならきっと『一体世の中どうなっちゃったんだい』と嘆くことでしょう。これは日本人全体の問題なんですよ」

寅さんがスクリーンから消えて 10 年。確かにこの間、日本は何か大事なことを失い続けてきたような気がする。

(2017 年 5 月 1 日)